佛教大学社会学部論集　第58号（2014年3月）

Iターンという生き方

――美山への移住者を事例として――

松　田　智　子

〔抄　録〕

本稿の目的は，都市生活とは異なるオルタナティブな生き方の体現者としてのIターン者に着目し，Iターンの動機，生活実態，地域との関係，社会的活動について明らかにすることである。

美山町在住のIターン者5名へのインタビュー調査から得られた主な知見は，次の通りである。①美山への移住の動機は，職業選択や生活信条を第一にして，それを実現できる土地を模索するプロセスで美山に出会ったということである。②地域との関係については，Iターン者（よそ者）であることを自覚しながらも，「地域に対して開く」「地域に溶け込む」努力をしている。③公共的な視点への関心が強く，地域の状況を相対化してとらえていることが，独自の社会活動の展開につながっている。

キーワード　Iターン，オルタナティブな生き方，地域との関係，社会的活動

は　じ　め　に

都市生活とは異なるもう一つの生き方としての「田舎暮らし」への関心が高まって久しい。高度経済成長が終焉を迎えた80年代あたりから，急激な経済成長がもたらした生活へのさまざま弊害に目が向けられるようになった。そして90年代以降になると，グローバル化やネオリベラリズムを背景に，生産性や効率性を至上の価値とする社会のあり方を問い直し，環境や食，さらには職を含めた生活そのものを根本的に見直そうとする価値観やライフスタイルが広がり始めた。

こうした変化のなかで，都会から田舎に移り住む，「Iターン」という現象に注目が集まるようになった。「Iターン」と言う言葉は，元来「長野県出身であるか否かに関わらず，『I』の字のようにまっすぐ信州に来てほしい」という願いから，都市部に「Iターン相談室」を設けたことに端を発すると言われているが(1)，現在では，「自ら選択して出身地以外の土地に移

住すること」が一般的な定義となっている。Ｉターンは，居住地や職業の変化だけでなく，人間関係や経済的な困難を伴うことが少なくないが，近年注目されているのは，自らの生活信条にもとづいて，効率性や利便性を重視する都市生活とは異なるライフスタイルを実現するために移住を選択するＩターン者であろう。本稿では，こうしたオルタナティブな生き方の体現者としてのＩターン者に着目し，Ｉターンの動機，生活実態，地域との関係，社会的活動について明らかにする。

1．調査対象地域と調査の概要

（1）調査対象地域の特徴

本稿が調査対象とするのは，京都府南丹市美山町に移住してきたＩターン者である。美山町は京都府のほぼ中央に位置し，町の 9 割が山林を占める中山間地域である。現在の人口は 4,454 人，65 歳以上の高齢者率は 45％ である（平成 24 年度統計）。2006 年に近隣の園部町，日吉町，八木町の 3 つと合併し南丹市となった。美山町は「知井」「平屋」「宮島」「鶴ケ丘」「大野」という 5 つの地区から構成され，それぞれの地区内に小さな集落が分散している。

美山町では，人口減少対策の 1 つとして定住促進事業が進められ，1992 年に「美山ふるさと株式会社」が設立されＩターン者の斡旋窓口となってきた。「美山ふるさと株式会社」が把握するところによると，1992 年から 2013 年までの 21 年間に 600 人程度の移住者があり，そのうちの約半数が同社の紹介を通じての移住者である(2)。

（2）調査の概要

Ｉターン者といってもさまざまなタイプが存在し，Ｉターンの動機，生活実態，地域との関係や社会活動のあり方も多様である。たとえば谷川は，大隅諸島への移住者のライフヒストリーと語りをもとに，移住時の年齢が「高い」か「低い」か，移住の理由が「理想」重視か「実益」重視かにもとづいて，4 タイプに類型化している。たとえば，「リタイア移住者」は，年齢層が相対的に高く，「健康的な暮らしがしたい」「のんびり暮らしたい」という理想を志向するタイプとして位置づけられている(3)。

本稿では，オルタナティブな生き方を体現するＩターン者の生活を記述するにあたり，特に，Ｉターン者の①「地域との関わり」，②「社会的活動」に着目する。図 1 は，この 2 つの軸をもとに，Ｉターン者を類型化したものである。第 1 の軸「地域との関わり」については，一般に農村社会では，内部の人間に対して強い同調性が求められる一方で，外部の人間に対しては排他的であると言われている。そうした農村社会に移住したＩターン者が近隣地域とどの程度オープンな関係を構築しているのか，地域における人間関係に着目する。第 2 の軸「社会的活動」に関しては，生活の個人化が進行する中で，地域の活性化や地域貢献について

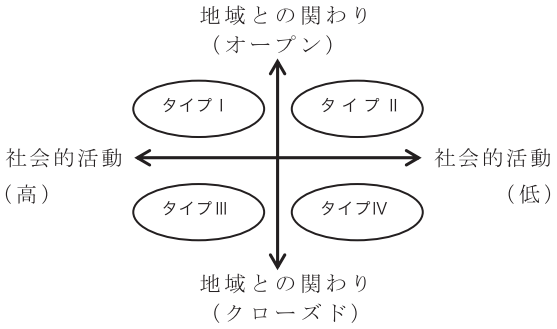

図1　Iターン者の類型

表1　インタビュー対象者の属性

	性別	年齢	居住開始年	出身地	家族構成
A	男性	28歳	2003年	大阪	妻，子ども（3人）
B	女性	42歳	2001年	東京	夫，子ども（1人）
C	男性	41歳	1994年	兵庫	妻，子ども（2人）
D	男性	46歳	1993年	東京	妻，子ども（2人）
E	男性	50歳	1983年	島根	妻，子ども（3人）

どのような意識をもち，活動しているかに着目する。これら2つの側面に着目する理由は，中山間地域では，過疎化や地域的共同性の弱体化が進行する一方で，Iターン者の移住によって地域住民が多様化し，いかにして新たな地域的共同性を作り上げ，持続可能な地域にしていくかが，重要な課題となっているからである。

上記のような問題意識の下，美山在住のIターン者の中でも，どちらかといえば地域との関係がオープンで，社会的活動に積極的な層に焦点をあて，対象者の選定を行った。実際のインタビューは，2011年2月に，男女6名を対象に実施した。各インタビューの時間は2時間程度であり，その内容は対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。本稿で取り上げるのは，対象者6名のうち，筆者が直接インタビューに関わった5名である。対象者5名の主な属性は表1に示す通りである。

2. Iターン者のライフストーリー

(1) 事例A

Aさんは現在28歳で，20歳の時に美山に移住してきた。22歳で結婚をし，現在は妻と子ども3人（5歳，3歳，1歳）の4人家族である。地元の中学校時代は学校生活に馴染めず，

学校に行けなかった。祖父母の勧めもあり，中国地方の農業高校に進学し寮生活を送った。寮の仲間たちとは，A さんがリーダーとなって，農業の基盤づくりをするから，10 年後に集まろうという話をしていたが，その仲間の中で，現在実際に農業をやっているのは A さんだけである。

①美山移住の経緯

A さんは，幼い頃から「おじいちゃん子」「おばあちゃん子」だった。不登校だった A さんのことを心配した祖父母が田舎暮らしを勧めてくれた。その当時は漠然と「農業でもすっか」くらいの気持ちで，農業高校（酪農経済科）に入った。しかし，実際に農業の勉強をしてみて，自分自身が農業に対してどれほど甘い考えをもっていたかを痛感した。そこから真面目に「仕事として農業をしよう」と思って，本格的に農業を勉強するために，同じ県内の農業大学校に進学した。

農業大学校卒業後，最初は「イチゴづくり」をしてみたいという希望もあったが，それで生計を立てることは困難であった。その後紆余曲折があったが，最終的には美山にゆかりのある人との出会いがあり，その人に美山の「養鶏場」を紹介され働くようになった。その養鶏場で 2 年半の研修をし，その後独立するための準備もかねて，養鶏場で月の半分くらいアルバイトをしながら，自分で鶏飼いをはじめた。自分が育てた鶏が売れるようになったのが約 5 年前で，それを機に完全に独立した。

美山という場所を選んだのは偶然であって，ここが観光地であることも一切知らなかった。ただ，自分のやりたい農業ができる場所が美山だった。

②美山での生活

美山で独立して養鶏場を営むための資金は，大学時代に貯金していた自己資金と「実践農場」のために国が貸してくれる資金で賄った。

独立してからの養鶏場経営は苦労の連続であった。最初は「鳥インフルエンザ」，その後も彼の養鶏場のひなが「ひな白痢」という法定伝染病にかかり，出荷停止の処分を受けた。これに対して国からの賠償は一切なかった。深刻な状況に陥ったため，自己資金で借金を全部返して，それで養鶏場経営をやめようと覚悟していた。しかし，彼の知らない間に，（周りの人たちが）取引先に勝手に出荷をキャンセルしていたのを知って，逆に「頭に来て」，何とか自分の力で養鶏場を再建しようと決意した。やはり，ここで止めてしまったら，「自分の 15 年間を全部棒に振ってしまう」という悔しい想いがあったからである。

全部自分の力で再建するという覚悟を決めて，いろんなところに頭を下げて，そして借金もして新しい 3 階建ての鶏舎を建設した。そこからは新しい契約先も開拓することができ，今の取引は伝染病がでる前の約 2 倍に増えている。3 年前からは独学で養豚を始め，地元のハム工場で出すハムも作っている。今も苦労はしているが，経営的には「目処」がつくようになった。

③地域との関係

地域との人付き合いで苦労した経験はほとんどないという。「基本的に裏表あったら田舎って嫌われるんで，もうあの，まるっきり裏表ださずにパーッとしゃべるほうなんで。特にそんな困ることはないですね」と語る。

近隣の地域活動にも積極的に関わっており，農民連（農業者団体）の青年部の部長，集落の氏子会の総代を務めている。その以外の地域活動としては，「M娯楽部」（約10人いる）や最近できた「M交流部」の農業グループのメンバーでもある。

④社会的活動

養鶏場の経営をしっかりやるとともに，美山の活性化にもっと貢献していきたいと思っている。彼の生活信条の1つは「自分がお世話になったとこには全力で返す」ことである。「僕は美山に来てものすごいあの，いろんな人にお世話になって。で，今のままやったら美山っていうものはもう廃れていってしまうのが目に見えて分かってるんで……」。

Aさんは，自分自身がIターン者であることをしっかりと認識しており，美山の生活においても，Iターン者にしか見えないものがあるという。地元の人たちは狭い視野で考える傾向があるので，地元の人のレベルを上げて，Iターンの人たちと「対等に渡り合える」ことを目指している。Aさんは，美山の活性化に関して，経営という概念を大切にしながら，さまざまなアイデアをもっており，Iターン者と地元住民とが一緒になってそのアイデアの実現化を図っていきたいと考えている。

（2）事例B

Bさんは，2001年に美山に移住して約11年になる。2002年に結婚し，現在は夫と子どもの3人暮らしである。夫とは美山のダム建設反対運動で出会った。Bさんは東京の出身で，美山に来る前の6年間は，山陰地方の大学で教員をしていた。専門は林学で，その関係で村おこしや地域振興について研究をしていた。

①美山移住の経緯

大学にいて「地域・地域振興みたいなことをやっていたんだけど，ま，結局なんか大学にいてもみないな感じ」になって，大学教員を辞めた。「論文を書いてても，この論文は誰のための論文だろうかとか，学会なんかも全然面白くない……」という「はがゆい」思いをもっていた。

美山とは，学生時代から縁があり，芦生に予定されていたダム建設反対運動に関わっていて，芦生や集落の人との繋がりや，今働いているところのオーナーとの繋がりがあった。「地域振興というのは，自然を生かしながらやっていくものだ」と考えていたので，それを実際に実践している人たちに出会って刺激を受け，大学教員を辞めて美山に移住する決断をした。「（美山だと）自分で田んぼも畑もやれて，漁師もできて魚も捕れる，これはおもいしろいかも

しれない」という思いで移住した。「お金はなかった」けれども，条件がそろっていると思った。

②美山での生活

美山移住後は，山陰の大学に勤務したいた頃からつき合いのあった O 氏の運営する観光農園でスタッフとして働くことになった。O 氏は地域に対する熱い想いをいつも語ってくれる人であったが，仕事に対してはとても厳しかった。約 10 年間，必死で頑張った。田畑，草刈，ブドウ畑，それからコテージの掃除，食事づくり，犬の世話など何でもさせられた。「何しろ，もう田舎ってね，やっぱり叱られてなんぼなんですけど，やっぱりね，結構大変でした」。「おまえクビや」「あしたから来んな」などと言われても，次の日，（私は）行くんですよ。大変やったな……」。農業はやったことがなかったので，「雇う方も大変やった」と思う。月々の給料はその時々で変化してきたが，現在は子どもが小さいので時給で働いている。家計は主に夫の収入によって支えられている。

B さんは，美山の自然学校の立ち上げにも関わった。最近は親子を対象としたプログラムの企画や運営にも関わっている。現在の美山での生活の中では，畑が好きで，料理も「結構楽しい」と思っている。散歩すると，川も山もきれいである。「ああ，良いとこに住んでるなあ」と「しみじみ」思う。

③地域との関係

地域には，お祭りや集まり，運動会などのイベントが多くあり，積極的に参加するようにしている。グリーンデイの掃除や溝掃除などの「日役」も多くある。集落のつきあいの中で心がけているのは，「それは絶対違うと思う」ということを言わないことである。田舎の人には，言わないでも分かっている世界があって，そこに「すごく」温かさがある。I ターン者では，やはりそういう世界はつくれない。「逆に田舎が I ターン者ばかりになってしまったら，田舎の良さはなくなっていくと思う」と語る。田舎の人付き合いは「ものすごく」関係が深くて，「おせっかい」である。「すごく面倒なこと」もあるが，これが非常に魅力的なところでもある。

④社会的活動

観光農園も自然学校も経営面では厳しいが，自然学校は助成金を一生懸命にとって運営している。B さん自身が，今後の生活の中で大切にしていきたいものは，「自然」と「自然の中の営み」であり，自然学校等のプログラムを通して，子どもに教えていきたいと考えている。

（3）事例 C

C さんは，大学卒業後の 1994 年にかやぶき職人になるために，美山の T 建設で働くことになる。途中，体をこわして 4 年間隣町でサラリーマンをしていたが，体調回復後は再び T 建設でかやぶき職人の修行を積み，2007 年に独立した。現在は妻と子ども 2 人の 4 人家族で

ある。

①美山移住の経緯

C さんの父親が転勤族だったため，幼い頃から2～3年おきに居住地が変わり，全国各地に住んだ経験をもつ。高校は簡単に転校できないということで，父親の出身地である H 県に家を建て，そこの高校に通ったが，大学は京都の短期大学に入ったので，H 県にも3年しか住まなかった。

大学卒業時の1月までクラブ活動をしていて，キャプテンだったこともあり就職活動はまったくしていなかった。同級生は必至に就職活動をしていたが，本人は会社に入ってサラリーマンになるというイメージが全然わかなかったという。これまでいろんな土地に住んで，「田舎に住みたいな」，「手に職をつけたい」，「自分が誇りに思えるような仕事をやりたい」という漠然とした願望はあった。

卒業後アルバイトを探そうと，偶然手にとった雑誌に，美山町 T 建設のかやぶき職人募集の広告が掲載されていた。「これやったら田舎に住めるし手に職がつくし，……一石二鳥やな」と思ってすぐに電話をして面接を受けたら，「もう春からすぐ来い」ということになった。

②美山での生活

その年の3月から働きだして，T 建設には5年いた。入った当初は1日8千円の日給でその他の保障はなかった。美山移住当初の2年間は T 建設の寮に入っていた。しかし，会社の事務所が隣にあって，夜9時，10時でも会社の人がよく訪ねてくるのが「嫌で嫌で」，3年目からは仕事場から離れた一軒家に引っ越した。T 建設で修行を始めた頃は仕事が不安定で，月の収入もばらばらで，雨が降った日は仕事ができないし，冬は仕事がないので京都に出て焼き芋を売っていた。T 建設での5年に及ぶ修行の後，体を壊して隣町の不動産会社に転職して営業の仕事を4年担当していた。その後体調が良くなったので，再びかやぶき職人に復帰し，2007年に独立した。現在は2名のかやぶき職人を正規従業員として雇っている。

独立当初は，かやの材料は一般に売っているものではないので，自分で仕入先を発掘していかなければならないことが大変であった。その次はお金に困り，現在は人材確保に苦労している。かやぶき職人は高齢化が進んでおり，美山町の中だけであると仕事量は減っているが，全国レベルでみると仕事の需要量は多く，今年1年も仕事の予定が埋っている。

全国的に50代，60代のかやぶき職人はほとんどおらず，40代の C さんの上の世代は80歳代になる。「今のうちにその人たちの技術を学んでおかないとなくなる」と思い，10年前に盛んに全国に勉強に行った。そこで美山では覚えなかった技術を，直接職人さんたちから学んで，現在では全国どこでもできるような技術レベルになった。それは C さんにとっては大きな財産で「これをやっぱり次の世代に引き継いでいかん」と思っている。現在，全国のかやぶき職人は50人くらいであるが，その内美山に10人以上がいるという。「だから美山ってすごいところなんです……」。その原点には，T 建設が若い人を積極的に養成したということがあ

る。「おかげさまでこうやって生計立てられて家族も食べられてあの，こうやって美山で幸せに暮らせていただいているのは，やっぱり親方から技術をこう伝授していただいたからであって……。何も訳分からへん大学生上がりの生意気な若造をですね，あの，育んでくれた美山にも非常に感謝していますよ……」。そういう意味で，美山町は「（心の）広い寛容的な」人たちが多い土地である。美山に対する深い愛情と感謝の気持ちがあり，美山に「恩返しがしたい」という気持ちが強い。

③地域との関係

地域の消防団にはいって 15 年になる。「日役」にも積極的に参加している。C 氏は I ターン者と地元の人との間にあまり隔たりを感じていない。「当然，こうして家を構えているので，集落の一員として義務も果たさなければならないし，おつき合いもしなければならない」と思っている。今年は集落を代表して「愛宕さん参り」をして愛宕さんの札をもらいにいく当番になっている。

④社会的活動

美山は「かやぶきの聖地」であると思っている。全国的にみてもこのような土地は珍しいという。しかも非常に寛容な人たちが住む人間的な町なので，かやぶきの保全や普及を通して地域を活性化させたいと思っている。

その一環として，昨年から「美山 F&B」という旅館業を始めた。これは，かやぶき民家の一棟貸しスタイルでヨーロッパの「Bed & Breakfast」と似たコンセプトであるが，ただし，この取組の狙いはそれだけに終わらない。たとえば，美山に移住したいという夫婦が農業だけで食べていくことが難しい場合，「こういう旅館業を副業にして美山で生活できますよ」というように，サイドビジネス的に展開していって，美山でこのような「F&B」の宿が何軒かできていけば，「お客さんもいろいろな宿を泊まり歩くことができて楽しいかな」と考えている。また，朝食は美山の食材を使った料理を提供し，地域の業者と連携していく。「F&B」の宿を拠点にして，美山全体をお客がフィールドとして動いて楽しんでもらう。そのために「美山グリーンツーリズム・ナビゲーター」という人材の養成も行っている。現在，さまざまな年齢層の人が季節に合わせて楽しめる滞在メニューを 100 個用意できるように頑張っている。「F&B」のねらいは，ただ泊まってもらうだけでなく，美山でこういう過ごし方ができるという提案と，かやぶきを一棟貸しだしするという提案で，新たな美山ファンを増やしていきということである。

（4）事例 D

D さんは，大学卒業後数年間東京でサラリーマンをしていたが，C さんと同様，美山の T 建設の職人公募に応募して，大工の修行をはじめた。当時，この募集で集まった人は 20 人くらいいたが，多くが途中で辞めていき，現在美山に残っているのはかやぶき職人の C さんと

D さんともう一人の3人だけである。

T 建設での5年間の修業と1年のお礼奉公の後，大工職人として独立した。現在も生業である大工仕事が8割を占めるが，その他に「S 舎」という NPO を立ち上げている。妻とは28歳の時に結婚し，一緒に美山に移住してきた。現在は妻と子ども2人の4人家族である。

①美山移住の経緯

D さんは，大学卒業後東京のコンピューター会社でプログラマーをしていたが，一番苦痛だったのが毎日満員電車で通勤することであった。勤務途中に読んでいた，法隆寺の大工をしていた西岡さんの考え方に共感し，「ああ，（仕事は）これやなあ」と思った。IT の仕事は，責任の所在が本人や上司も含めて曖昧な点が多かった。しかも，自分でソフトフェアを作って「世に出した」としても，数年後には自分が関った仕事は跡形も残っていない。それに比べると，建築という仕事は，「自分の体より大きくて，自分の人生よりも長いもの」をつくることができ，自負心と満足感をもたらしてくれる。今振り返ると，これが大工に転職した大きな要因だったかもしれない。

転職を決意してからは，大工の仕事を体系的に教えてくれる場所を全国いろいろ調べて歩いた。その時に，旧美山町ではかやぶき職人の激減に危機感を抱いて，町をあげてかやぶき職人を育成しようという動きがあった。大工の見習いを募集していることを知って，それで美山に来ることになった。また美山町は，全域が都市計画区域外で，大工が自分の裁量で「自分が本当にいいと思われる家を建てる」ことが可能であり，なおかつ京都市内まで1時間で，自分の住んでいる地域よりも上にダムがないという条件も備えていたので，美山町に行き当たってからは，移住の決断は早かった。

②美山での生活

T 建設での大工の修行は5年に及びその後1年間の御礼奉公を経て独立した。修業中の最初の1, 2年目は「（辞めて）帰ろう」とほとんど毎日思っていた。にもかかわらず続けることができたのは，家に帰っていろいろ話を聞いてくれる妻の存在があったことが大きかった。加えて，修業先の大工の中に，「すごく短気」だけれども，このエリアでは誰もが知っていて一目置かれている親方がいて，その親方と喧嘩をして「僕はもうやめじゃ」と3回ほど帰ってしまったことがあった。その時にその親方が「……帰ってこい」と迎えに来てくれ，それで続けられたという点もある。したがって，「自分だけの自助努力で続けてきたというよりは人に助けてもらった方が大きい」と思っている。

ただし，大工の仕事は，「（親方から習う）」というよりも「現場に教えてもらう」という側面が大きかった。「（修行の中で）だんだん真実を自分で見つけていくのが徒弟制度なのかな……」と思うようになった。最初の2年半くらいは親方に付いて仕事をしていたが，その後は現場をあてがわれて，それを自分でこなしていくというやり方に変わっていった。

独立してからは大体1年で一棟の新築をこなすというペースで仕事をしてきた。独立後し

ばらくの間は，普通の仕事もしていたが，2007 年頃から「石こうボードやクロス張りの仕事はしない」と宣言して，土と竹と木だけでつくるということを全面的に出すようになってから，町外から仕事がくるようになり，とりあえずこの先の 1 年間は仕事の予定が埋まっている。

③地域との関係

地域の行事は，「フル参加」である。地域の人と一緒に酒を飲んでいるし，旅行も欠かさず参加している。ただ，行事の中には取捨選択して参加しているものもある。たとえば，消防団に入っているが，「敬礼が嫌いだから」という理由で，訓練には参加しない。しかし，実際の火事の時には率先して行動する。「僕が最初に筒先持ったのは，実際の火事現場です」と話す。地域の人には，「僕は最初から，東京生まれで田舎のことは何も分からないので，できることはやるけど，できないことはできない」と言ってきた。最初は「ちょっとこの人おかしいなあ」と思われていたかもしれないが，現在はここに住んでから 20 年近くたっているので，地域の人とは皆「仲良し」である。

一方，I ターンだけの集まりには極力参加しないようにしている。その理由は，「地元に溶け込めない」「地元の人に嫌な目にあった」というような「傷のなめ合い」になって，マイナスの気持ちだけが増幅されるからである。

地域との関係で難しい点は，やはり根回しをしっかりとしておかなければならないということである。最初はそのことがわからなくて，だいぶ頭を打ったり，遠回りをしたが，地域を巻き込んで何かをするような時は，最初にその話を誰にするかを吟味しておくことが重要である。伝える順序を間違えると絶対に前に進まなくなってしまう。

④社会的活動

美山は自分にとっては「プロミスランド（約束された土地）」と感じており，「もうここしかない」という心境になっている。ただ，美山が合併して南丹市になってしまったことには「千年の悔いが残る」と思っている。D さんは，「合併には徹頭徹尾反対」という立場を貫いた。

2005 年に任意団体「S 舎」を発足させ，2008 年にはその拠点となる施設を建設した。現代の「公民館」をつくるという感覚で，地域の人が集まって，「同じ何か思いとか価値とかを共有できる場」にしたいと思ったからであり，実際そのようになりつつあると語る。「この建物自体，もう磁石になって，……1 つの話題となって，……さらにまたいろんなものを引き寄せてくるというような，そういう幸せスパイラルみたいなものが起きる。ここに自分のアイデアをもった（人たちが），こんなんやりたい，あんなんやりたいよという人が寄ってきて，で，風呂敷を広げる。その場所を提供しているんです」。2009 年にはカフェも始めた。多くの人がこの建物の中に入り，住まいと空間を実際に体験することによって，「土と竹と木でつくった建物というのはこういうものなんだよ」ということをアピールしている。また，これが営業活動にも繋がると考えている。2011 年に NPO 法人にしたのは，活動の中身は変わらないが，

京都府や南丹市など自治体との関係上，NPO法人にしておいた方が「付き合いやすい」という判断があったからである。

現在，新たな活動として取り組んでいるのが水力発電である。Dさんは，世の中の全部は変えられないと思っているが，自分の身の周り，自分の家族，それだけでも「安全だよって思えるもの」を構築していくことが大切だと考えている。ひとりひとりが自分のいるところで，できることをやっていくことが大切である。Dさんのモットーは，「自然とともに自然に生きていく」ことである。

（5）事例E

Eさんは，1983年に美山に移住してきた。高校時代から酪農の道に進んで，田舎で農業をすると決めていた。ただし，どこの田舎を選択するかということについては特別なこだわりはなく，酪農のチャンスが地元の田舎にはなくて，たまたま美山にあっただけである。家族は妻と子ども3人の4人家族であるが，酪農は妻とふたりでやっている。Eさんは生業の酪農に加えて，振興会関連の役職やさまざまな地域活動に積極的に関わっている。

①美山移住の経緯

Eさんは，高校からずっと酪農を勉強していた。中国地方の大学で畜産を専攻していて，就職する時にたまたまゼミの先生が「美山町でこんな話がある」ということを知り合いから聞いてきたことがきっかけで，全く知り合いのいない美山町で酪農を始めることになった。Eさんの構想では，畜産は投資が大きいので，40歳までにお金を貯めて，その後脱サラして酪農を始める予定でいたが，ゼミの先生から「（40歳だと）お前金が貯まっても体が動かない」と言われ，大学4年生の秋に美山に来る決意をした。その日はちょうど地元の役場の試験日と重なっていて，それを受験しないで美山に来たので，親から勘当され3年間連絡が取れない状態が続いた。美山在住歴は今年で28年になる。

②美山での生活

酪農が軌道にのっているかどうかはわからないが，10年前に投資は終え，（設備面では）「もう，これで整ったな」というところに来た。この間農業合併の影響もあり，現在は借金を返済している途中である。最初の6年間はひとりでやっていたが，その後結婚して，現在は妻とふたりで酪農をやっている。

Eさんにとって，酪農はライフワークである。まったく知らない土地で，ゼロからはじめて，「一応でも整えてやっている」。だから酪農はやり続けることが大事だと考えているし，自分自身の生活のベースが酪農にあるということは「絶対普遍的なこと」と思っている。

Eさんは，美山に来て間もない頃に，農業を志した同世代の若者3人と青年団で出会い，「M娯楽部」を立ち上げた。当時，酪農や養鶏を含めて世襲制が多く，人びとの酪農や農業に関する理解が浅かった。3人は皆「僕らは農業後継者や」という考え方で，自分たちの子ども

に（農業を）押し付けるのではなく，農業がやりたい後継者を育てることが大切であるという点で考え方が一致していた。偶然にも支所から，4 H クラブ（農業青年クラブ）関連で声がかかったのをきっかけに，「自分らの農業感でやりますよ」ということを条件に，「『楽しく（Enjoy）』，『気楽に（Relax）』，『楽々（Rich）』と，おもしろい農業『楽農』」(4)をモットーに「M 娯楽部」を始めた。その後，ハム・ソーセージの修行に出ていたもう一人が加わって，「家畜を飼育するだけが農業ではないとの想いを実践するために生産・加工・販売まで」(5)を手掛けるハム工房も立ち上げ，現在も出資しながら理事をやっている。

③地域との関係

E さんが美山に来た当時は，どの集落にもトップ（＝権力者）がいて，その人たちには「絶対（逆らえない）」という雰囲気があった。E さんが地域住民として受け入れられるかどうかも，そのトップが E さんを認めるかどうかで決まるという時代であった。役職は与えられなかったが，トップの人から「地域の起爆剤になれ」と言われた。その発言の背景には，当時地元の若者がどんどん隣町に出ていき，地元に残った若者も元気がなかったことがある。

しかし，トップの人たちが亡くなり世代交代が進み，その後を引き継ぐ世代が E さんと同じ 50 歳前後の世代になった。E さんには美山に移住して 27 年という年数の積み重ねがあり，それでいろんなポジションがまわってくるようになった。

E さんによると，I ターン者の中には優秀な人材がいるが，勝手に自由発信して，地域の役割を担いたがらない人が少なくない。また地元の 20 代，30 代の世代もここに住んでいるという役割意識や責任感に欠けている人が多い。今後，地域をどうまとめていくか，難しい課題であると思っている。

④社会的活動

E さんは，集落の振興会の役職をいくつも担っている。山村留学，定住促進，地域交流部長や振興会の事務局もやっている。特に振興会の事務局長は地域のことを大体把握しておく必要があるため，必然的に関わる地域関連の仕事が多くなる。

今年新たに立ち上げたのが「住みよい安全安心のまちづくり」で，今後振興会が力をいれていくべき取組となる。地域の人びとは「高齢社会」をまさに「じかで」感じている。高齢者の絶対数が増加する中で，高齢者自身が住みやすい環境として求めるものは人によって異なる。そこで，「C センター」をたちあげ NPO 化して，地域にどんどん入っていって，人びとの生活支援的な部分を担うということを考えている。NPO 化を考えているのは，振興会で担うのは限界があると考えているからである。

3. 考察とまとめ

I ターンは，出身地以外の「田舎」に自発的に移住することであるが，そこには，「移住す

る」という決断と「移住先の選択」という2つの行為が伴う[6]。移住の決断と移住地の選択にはさまざまな動機が介在している。Aさんと Eさんは，「農業がしたい」という動機に突き動かされて，その夢が実現できる場所として，美山という土地にめぐりあった。ふたりとも，人生の早い段階から農業（養鶏，畜産）に強い関心をもっていた。美山に関する有益な情報を提供してくれるキーパーソンとの出会いがあり，美山は農業をする条件が整っているという判断の下，移住を決断した経緯がある。一方，大学教員やサラリーマンから転職したBさんとDさんの事例や，自己の将来を模索しつつ不安を抱えた大学生だったCさんの事例からは，不安や迷いを抱えながらも，旧来のサラリーマン的な生き方とは異なるオルタナティブな生き方に強い関心があり，そのことが美山への移住につながったことがうかがえる。5つの事例に共通していえることは，職業選択や生活信条を第一にして，それを実現できる土地を模索するプロセスで，美山に関連のある人物や会社を通して，美山という地域に出会ったという点である。

移住後の生活においては，ほとんどの人が動機（幻想）と厳しい現実の間でさまざまな困難を経験していた。T建設で大工の修業を積んだDさんからは，徒弟関係の下での修行が，時に親方との激しい軋轢をもたらし，最初の数年はほとんど毎日「辞めて東京に帰ろう」思っていたことが語られた。同じくT建設でかやぶき職人の修業をしていたCさんの語りからも，修業生活が肉体的にも経済的にも厳しさを強いられるものであったことがうかがわれた。さらに，「農業がしたい」という強い志をもって移住を決意したAさんは，鶏の出荷停止という厳しい状況に2度も遭遇し，一時は養鶏場経営を廃業することも決意した。これらの事例から共通して読み取れるのは，さまざまな葛藤や紆余曲折を経験しながらも，いまの現実にとりあえず向き合い継続することで，将来を切り開いていくという姿勢である。ただし，それは決してひとりでなし得たことではなく，まわりからの支援に支えられた側面も少なくない。実際，現在の仕事や生活に関して尋ねた際に，「周りからの支援があったからここまで頑張れた」「周りの人に感謝している」という表現がしばしば用いられた。

地域に関する語りにおいて特徴的であったのは，すべての事例において，Iターン者（よそ者）であることを自覚しながらも，「地域に対して開く」「地域に溶け込む」努力をしていることである。具体的には，地域の消防団に入り，「日役」や地域の行事にも積極的に参加するとともに，さまざまな集落の役割を担っている。こうした地域に溶け込む過程を通して，地域独特の暗黙のルールを学習し，地域への愛着が育まれていくことがうかがわれる。「美山は『かやぶきの聖地』」「非常に寛容な人たちが住む人間的な町」「美山は自分にとっては『プロミスランド（約束された土地）』」といった語りは，美山への愛着がストレートに表明されているといえる。

また，本稿が対象とした5つの事例は，概して公共的な視点への関心が強く，地域の状況を相対化してとらえており，それが結果的に，独自の社会活動の展開につながっていると思わ

れる。B さんが関わっている観光農園や自然学校，C さんが始めた「美山 F & B」，D さんが立ち上げた「S 舎」，E さんが中心となって最近取り組みを始めた「C センター」などは，斬新な発想をもとに企画，実践されている社会活動である。

このようなＩターン者は美山での暮らしの魅力と課題の両方を知っているという点で重要な地域資源でもある。今後は，そうしたＩターン者の感性や経験を積極的に取り入れ，地域独自の取組みを実践していくことが，地域の多様性と活力を強めることになるだろう。

〔注〕

(1) 菅康弘「第 4 章　田舎暮らし－〈住〉を“選択”することの意味とは」小川伸彦・山泰之編『現代文化の社会学入門　テーマと出会う，問いを深める』ミネルヴァ書房，2007 年，p.60。
(2) この数値は美山ふるさと株式会社関係者からの聞き取りによるものである。
(3) 谷川典大「大隈諸島への移住者とコミュニティ－ショート・ライフヒストリーと「語り」－『人文地理』第 56 巻第 4 号，2004 年，p.68。
(4) http : //www.miyamahamu.com/2013 年 9 月 15 日閲覧
(5) 同上
(6) 菅康弘「第 4 章　田舎暮らし－〈住〉を“選択”することの意味とは」小川伸彦・山泰之編『現代文化の社会学入門　テーマと出会う，問いを深める』ミネルヴァ書房，2007 年，p.61。
(7) 谷川典大「大隈諸島への移住者とコミュニティ－ショート・ライフヒストリーと「語り」－『人文地理』第 56 巻第 4 号，2004 年，p.68。

〔付記〕

本稿は，平成 23 年度特別研究費による研究成果の一部である。インタビュー調査を実施するにあたり，関谷龍子氏（佛教大学公共政策学科准教授）と大石尚子氏（龍谷大学博士研究員）には，共同研究者としてご尽力を頂いた。心より感謝いたします。また，ご多忙の中，快くインタビューに応じて頂いた方々に心より御礼を申し上げます。

（まつだ　ともこ　現代社会学科）
2013 年 10 月 31 日受理